

<書評>

The Interpreter's Journal

Benjawan Poomsan Becker

(Paiboon Publishing 2011 年)

Pages: 220 p.

ISBN: 978-1887521994

評者 鶴田知佳子(東京外国語大学)



通訳者に人はいかにしてなるのか。それぞれの通訳者にはそれぞれの歴史がある。古代より、なんらかのかたちで通訳者の役割を果たす人たちが存在しており、ある場合には一家の家業としてたずさわる、あるいは国家のなかの一部の役割を担う者として生業を立ててきた人たちも存在する。その場合は、どちらかという体制側に組み込まれた立場の人たちであった。西ヨーロッパ諸国とのあいだでの通訳官として若手官僚を養成したオスマン帝国の例がある。あるいは日本における長崎出島のオランダ通詞は、下級官吏の立場を与えられていた。木村直樹氏のノンフィクション「<通訳>たちの幕末維新」(吉川弘文館、2012年2月)に詳しい。また、最近の小説として篤木蓬生氏の「日御子」では、古代の日本でことばを武器として戦った通訳一族の物語がつづられている。

今回とりあげる本の著者が通訳者になったのはまったく違った状況からである。自らの才覚と努力で祖国のタイをはなれアメリカのサンフランシスコベイエリアで通訳者としての生活を手に入れた。そこにいたる過程は偶然と必然の両方が混じっているが、この著者の来歴は非欧米から欧米への旅でもあり、貧困から豊かさへの旅でもある。これも日本の私たちから読むと興味深い。アメリカに至る過程でこの著者は日本の神戸で生活し神戸女学院高校、のちに大阪外国語大学での半年の集中講座を経て神戸大学に学び、日本語を身につけている。もともと、麺類の得意な母の経営する食堂でアメリカ人の平和部隊の隊員と出会って英語へのあこがれが増す。父親は軍隊で英語を学びその後イギリスの航空会社に職を得たが、一家はバンコックで比較的恵まれた生活を送っていたが、ラオ族である一家は親族の住むタイ北部の村へと戻って生活することになる。そこで父親の経営する牧畜業がうまくいかず、料理の得意であった母が開いた食堂で、英語ができる少女にとって、恋人へのラブレターの英語への翻訳を頼まれたのが最初の通訳翻訳として収入を得た、原点となった。

アメリカに行って勉強をしたいと夢見る少女は留学生団体による留学試験に応募するが、アメリカではなくて日本に学ぶことになる。日本の高校で学んで帰国したのち、タイ北部の公立大学に進学し、今度は日本の文部省の奨学金を得ることになり大学院で社会学を学ぶ。日本語を身に付けたことで大阪地域で犯罪にまきこまれたタイ人の通訳を税関や法廷でおこなうこととなった。その後、偶然タイに休みの間に戻る途中に経由地として滞在した韓国の空港で、

迎えにくるはずの友人がいなくて困っているところに、同じくタイからソウルに来て、サンフランシスコへの乗り継ぎ便がとれずに困っていたアメリカ人男性と出会う。

その後、この男性と結婚して、サンフランシスコベイエリアで定住し、その土地でタイ語とラオ語の通訳者として、タイ人と欧米人のカップルに生じた争いごとの通訳をする、あるいは刑事、民事、家庭裁判所、税関、移民局での通訳が必要な場面に立ち会うこととなる。しかし物語は著者が通訳者としての成功をおさめたところで終わっていない。仕事がますます忙しさを増して伴侶と別れ、メキシコ人の恋人と出会ってスペイン語を身につけるも破局、さらに著者が書いた何冊ものタイ語習得の本を読破していたという現在のパートナーと出会うことになる。本書はいろいろな読み方ができる。結婚を通して貧しさからの脱出を試みるシンデレラ物語とも読める。あるいは、知識と外国語力を得て、専門職業人志向の若い女性の夢をかなえる物語とも読める。あるいは、親思いの娘が、タイの伝統である娘が両親の世話をするという伝統にのっとなって、苦勞のしどうしであった両親に家を建ててあげるなど、親孝行をもって報いるという孝行物語としても読める。

いずれにしても、通訳という職業が人の人生にいかに関わっているのか、人生を変えていくのか、という点においても興味深く読める本である。この本は 22 の短い章からなるが、個人的なものがたりの部分を P とし、通訳に関するところを I、タイや西欧との関係やタイ語、ラオス語について述べているところを社会にかかわる S としてあらわしており、個人にかかわるのが 10 章、通訳に関わるものが 7 章、社会にかかわるものが 5 章となっている。評者個人の興味からすると、通訳に関する章がいちばんの関心であるが、外国語学習について書かれている章もきわめて示唆に富んでいる。著者自身は子どもがいないが、「子どもに与えることのできる最大の送りものは外国語に対する興味をもたせること」という助言をしている。通訳者としての著者の自信のほどは、法廷場面においては優秀な弁護士だけでは足りない、優秀な通訳者が必要である、ということばにあらわれている。

日本でも近年多言語多文化化がすすみ、日本に職を求める人たちの需要が多くなっている。毎日新聞(2012年6月27日)によると、横浜市では日本語のできない外国人子弟が急増しており、政府は受け入れ態勢を整備するように、また労働力ではなく人間として扱うようにと記者の主張がなされており、その中で語学ボランティアやコミュニティ通訳が果たす役割は大きい。

朝日新聞(2012年7月11日)では、「日本の中学、やっとならした 不就学 つかめぬ全容」として、東京都新宿区の事情が説明されているが、多くの国の子供が集まる新宿区は、通訳の派遣、日本語の初期指導、日本語学級の設置といった学習支援策を打ち出している。

このような状況ではコミュニティ通訳が必要になる場面が増えてくるのは必至である。アメリカの状況を日本も追いかけていくであろうという意味でも、著者は貴重な体験を語っていると思われる。著者は、アメリカで苦勞をしている同胞を通訳と言う仕事を通じて助けることで、自分自身の職業人としての成長を果たしていく。日本においても、英語だけではなくさまざまな言語での通訳者が必要になるとと思われる中、参考になる本であるといえる。